神吉研究室 -Planning of Dynamism-

Kanki Laboratory -Planning of Dynamism-

社会関係の中で

神吉 紀世子

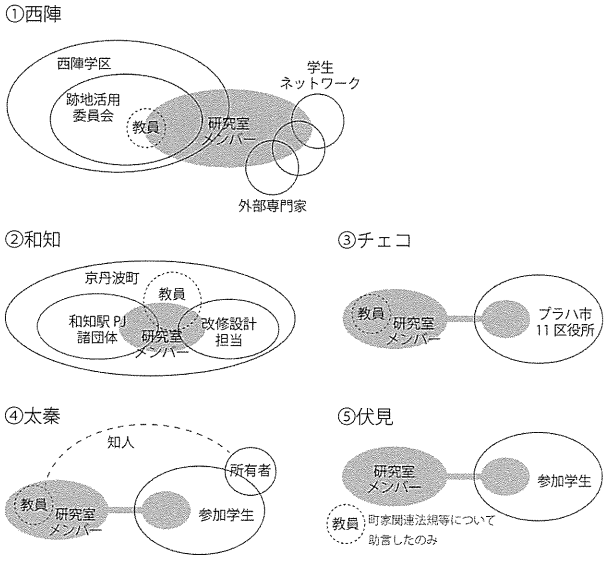
ここで紹介されているのは、研究室のメンバーそれぞれが「自力で」進めているプロジェクトである。学士・修士・博士学位のための研究はまた別にある。教員はどこに介在しているか様々であるが目立つことは可能なかぎり少なくするようにしている。

大学研究室は受託研究から自主研究までマネジメント次第で幅広い活動スタイルが可能で、ケースに応じ関わる主体間での責任分担を見極めてスタイルを組み立てる。大学の演習・実習等と、社会の中では現実である活動を、いかに連動させるかも重要なマネジメントの一つである。地域の諸関係の中に「大学の人」はいかに位置づくべきか、は結構難しい。地域状況の一方的消費にならない、かといって過度に遠慮しない、適切な責任分担のもとでこそ、本人名義の成果が明確に成立する。そうしたハッピーな大学と地域の関係を継続的に吟味することを伴って、大学の人は地域に本当の意味で居続けることができる。月日の経過とともに位置づけも変化する。

教員の目立つことを少なくするというのは、学生の位置づけを気にかけつつ、関係を信頼して任せるということである（右図）。

しかし、実在の社会に関わるのであるから、トラブルの種は実に複雑に発生する。トラブルの種に気がつき早く対応できるか、教員は試される。最前線にいる学生が早く察知し相談してくれれば一番である。

研究室は都市・農村計画（Planning）を扱っている。Planning とは定義が難しいが、必ず対象として物理的地域と複雑な社会関係が登場する。一般的にイメージされるのは「調査と提言」「法定計画立案」等であろうが、地域状況と社会関係の推移の中でちょうど実現可能な策をつくりこみ、近い／遠い将来に近づけていく種々の営みを手掛ける。関わった者は責任を担うが個人による統率制御はせず、策が柔軟に影響をもち将来につながっていくアウトカム志向が Planning の醍醐味である。ここに専門性や創造性が問われる。地域状況と社会関係を常に注視し、その中で影響の発信元となる主体としての自身の可能性について、的確に捉えることが身につくよう、学生諸氏に期待したい。



参画する研究室メンバーの位置づけと教員の立ち位置
（2016 年 9 月現在）

図１　西陣ベースメント提案図の全体像

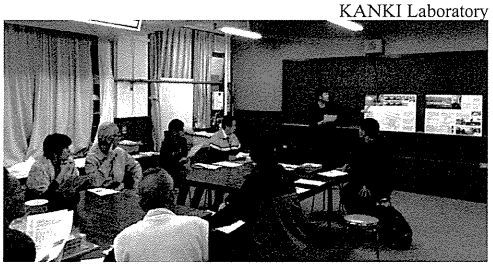


図２　小学校跡地活用委員会の様子

図３　教室パズルで活用案を検討

元西陣小学校活用プロジェクト

博士２回生　太田 裕通

■概要　―京都における番組小学校校舎利活用―

京都には明治２年に創立された番組小学校の戦前校舎が多く現存し、統合などによって廃校となった場合でも校舎は利活用している事例が多い。本プロジェクトの対象である元西陣小学校は平成７年に桃薗小学校と統合されて以来空き校舎であり、時々の一時的な利用以外の活用方法は未だ決まっていない。平成26年度より西陣学区住民福祉協議会によって組織された「学校跡地活用委員会」に研究室メンバーも参与し、この２年半、活用に関しての議論が進められてきた。元西陣小は地域のシンボルとしても愛されている一方で、改修補強の必要性、活用の方式によっては失われる可能性がある本来的な価値等が重要な論点となっている。本稿は、学生メンバーを中心にこの議論経過と共に行ってきた活動の報告である。

■建築的価値　―現存する元西陣小学校校舎―

平成26年度の同委員会における勉強会において、京都府立大学大場修教授、京都華頂大学川島智生教授より講義いただいた。その結果として、現校舎の価値を以下のように要点をまとめた。

①本館・教室棟・体操場 が揃う京都番組小学校としての全体像が現存する

②昭和９年の室戸台風災害前に設計され、復興事業以降の標準化された校舎ではないため固有性が高く、装飾的な校舎から構造そのものを活かしたシンプルなデザインへ変わる時代の象徴的存在である

③京都市役所の新進技術者たちが校舎建築設計に携わっており、学校校舎は当時の京都市役所の技術者が手がけた公共建築作品のうち、中心的位置を占める

■活用ビジョン研究　―「西陣ベースメント」構想―

コンセプトは、「番組小学校の従来性をベースに『小学校らしさ』を残した活用案を考える」ことである。「宿泊施設」の最低限の機能も配置した上でモザイク的利用が教室ごとにあらわれ、時期による可変性を組み込む。利用は「地元利用」から宿泊施設の客室の「固定利用」まで教室ごとに柔軟性のある運営とし、年間を通しての稼働率によって校舎利活用について経済的可能性を伸ばすことを考えている。このような運営を可能にするために地元、外部民間、専門家、所有者である地元自治体による共同会社の設立を想定し、それぞれの運営・経営のシェア可能性をさらに検討する。柔軟な運営形態の提案は、現在の元西陣小学校を部屋単位で活動の場として用いる地域住民・他諸団体や、小学生野球クラブといった方々の利用、また夏祭りのような地域のイベント時の学校全体の利用を地域が今まで通りに継続できる考え方であり、これからも元西陣小学校が地域に根付いた場所―ベースメント―としてあり続けるためのアイデアである（図１）。

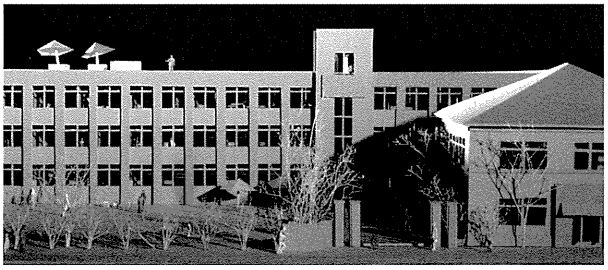


図４　元西陣小学校模型

図１　JR 和知駅

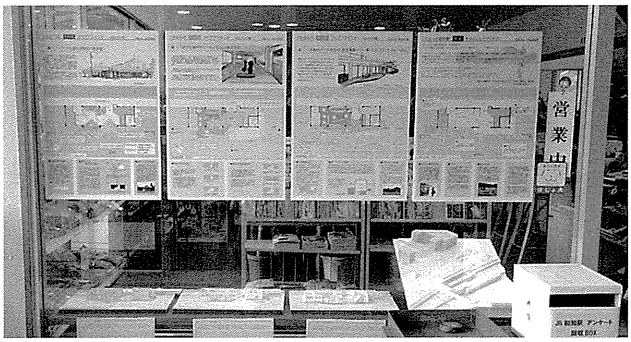


図２　学生案の展示

図３　布屋根による待合空間

和知駅プロジェクト

修士２回生　清山 陽平

■和知と和知駅

京都市内から JR 嵯峨野山陰線に乗り、北におよそ１時間半。車窓を山の緑と広い空の青が二分し、小さな建物が数えられるほどになってきたあたりに、和知[註1]のまちはある。山々の合間を流れる由良川によるダイナミックな河岸段丘に沿って、丁寧に手入れされた田畑がのびやかに広がっている、美しいまちである。

JR 和知駅（図１）は同町内に４つある JR の駅の中で最も利用人数が多い中心駅であるが、それでも１日の利用客数は 200 人にも満たない。モータリゼーションの発展や少子高齢化、人口減少に伴い、駅を利用する人の姿は次第に減っていったが、それでもなお、駅は和知の中心である。また駅周りには役場や郵便局、銀行、ホール、図書館などが集まり、すっかり店の数は少なくなってしまってはいるものの、商店街の街並みは今も残っている。朝には電車の時間に合わせ、市内方面の学校へ通う高校生が親の車に送られてくる。夕方には小学生の一行が駅に集まり、そこからバスに乗って家に向かう。夏には駅前で祭が開催され、広大な駅前広場には櫓や屋台、人が溢れ、活気に包まれる。駅の周辺に住む人たちは、最盛期の駅の姿に思いを馳せながらも、「現在ともる小さな灯を消してしまいたくない」という思いから、駅内喫茶店の営業や駅員業務、駅前での定期イベント等を住民主体で行っている。

「和知駅プロジェクト」は、こうした場所や人との関わりあいを通して進められている。

■「和知駅プロジェクト」―活動の発端と経緯―

2015 年４月：地方創生事業の一環としての「駅再生プロジェクト」について、神吉研究室が京都府からの相談を受けたことが本活動の発端であった。駅舎の改修等によって駅を中心とした地方の活性化を目指す「駅再生プロジェクト」において、初年度におけるモデル駅として取り上げられた京都府内数駅のうちの一つが和知駅であった。その後、修士の学生・研究生で複数の駅と関わっていく中で、地元住民の強い意志や協力等もあり、和知駅における活動が本格的に進展してきた。

2015 年８月：京丹波町和知支所、駅運営に関わる駅周辺の住民を含む駅関係者との意見交換会において、「待合空間の向上」をテーマとした学生からの駅舎改修案３案を提示した。

2015 年 10 月：学生案３案を「たたき台」とする形で地元住民の意見を募集した。学生案の模型やプレゼンボードを駅舎構内及び喫茶店内に展示し（図２）、広報にあたっては非常に高い地元視聴率を誇る LCTV に出演し呼びかけを行った。特に駅内喫茶や駅舎前面に対するものを中心に、多くの意見が得られた。

2016 年４月２日・３日：和知で開催されたアートイベントに合わせ、駅前に仮設的な待合スペースを設営した。住民が地元野菜等を売る店を出す中で、私たちからは和知を訪れた電車利用者が待ち時間を過ごすための空間を、布屋根によりつくり出した（図３）。

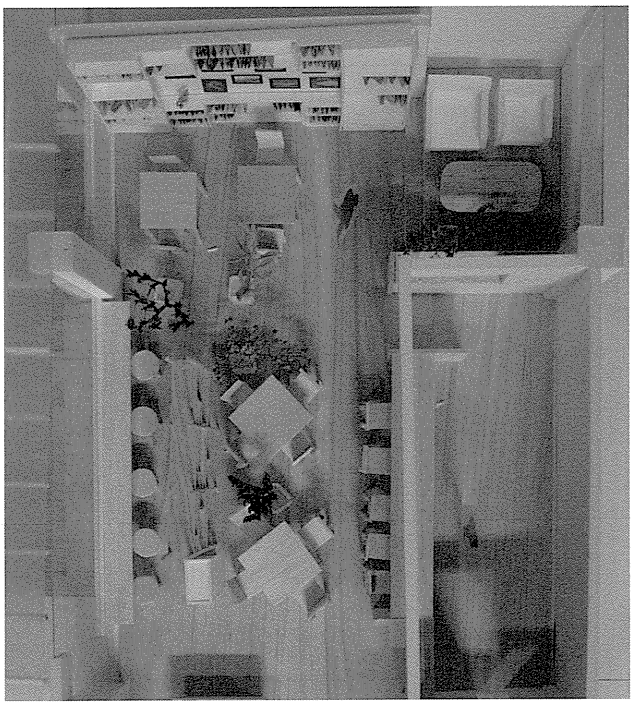


図４　内装改修案

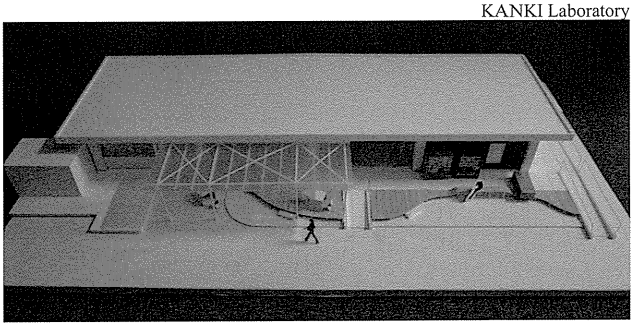


図５　外装改修案

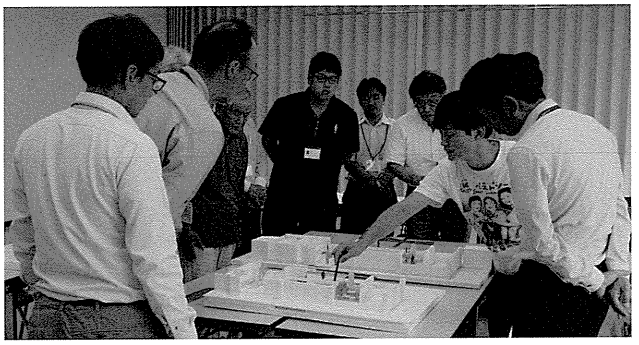


図６　地元の委員会の方々との話し合い

このような一年間の活動を経た結果、京丹波町で和知駅改修の予算が確保されることとなり、改修が実現することとなった。現在は先に集めた町民の意見を基に案を作成し、話し合いを通して基本設計を進めており、今年度中の改修完了を予定している。

■「和知駅プロジェクト」―和知駅改修のコンセプト―

昨年度からの活動を踏まえ、改修にあたっては以下の三点を大きな軸として進めている。

①待合空間の多様化と居心地の向上

現状の駅待合室は暗く、狭い。また駅内喫茶は常連客の利用がほとんどであり、若者世代を中心とする多くの人々は外部で待合時間を過ごしている。改修により待合室を明るくし、また駅内喫茶については店内の段差をなくし棚を整理することで空間を広く使えるようにした上で、奥まった席や窓際のカウンター席など座席の性質を多様化し、常連客も引き続き使いやすく、その上で若者世代も入りやすくなるような店内を目指す（図４）。

②駅の利用をディスプレイし瞬間的な人数の増大を受け止めるためのデッキ空間

水平性の強い駅舎に対し曲線的なウッドデッキを駅舎前面に広く拡張することで、駅を利用する人の姿を駅のファサードに表出させる。中央のスロープを挟んで左側（喫茶店側）には既存の庇を拡張した屋根をかけ半屋外にすることで、右側との空間的差異を持たせる（図５）。またこのウッドデッキは小学生の下校時や祭など、瞬間的な駅前利用者の増大を受け止めるための空間にもなる。

③駅舎改修を通した新たな関係性の構築

改修においては駅舎の形態操作だけではなく、駅周辺の運営者と駅の利用者との間の新たな関係性の構築が重要である。改修案について広く話し合う場を設ける（図６）、一部の改修を住民とともにイベント的に行うことなどを通して、これを目指す。

■縮小する地方と「駅」の可能性

人口減少社会となって久しい。多くの自治体において縮小に向けた計画が進められる中で、和知のような中山間農村地域においても、より少ない人口で生活に密接な役場の地域を維持していくことが必要とされている。高齢者人口の比率が高い分、むしろ都市以上にその緊急性は高いとも言える。縮小する農村地域を考える際、例えば駅はその中心となるポテンシャルを秘めた場所である。とりわけ和知駅は、先述したように交通インフラとしての駅機能をベースに、様々な公共施設が周囲を取り囲み、祭やイベントなども行われる、言わば地域文化の中心となっている。縮小していくまちを、それでも寂しくないまちにするためには、駅周辺の「小さな灯」を将来に渡り継いでいくことは重要である。和知駅の改修は、そのための一助とならなければならない。

1）合併以前の旧町名。10年前の丹波町・瑞穂町との合併を経て、現町名は「京丹波町」。

イジュニームニェスト（Jižní Město）における地域の魅力探しイベント

－社会主義時代のプレハブ住宅開発地の再価値化を目的として－

博士３回生　田中 由乃

■イベントの背景と目的

チェコ共和国プラハ市には、パネル工法によるプレハブアパートが建ち並ぶ社会主義時代の住宅開発地が多数存在する。これまで一般的に、社会主義時代の住宅開発地というと、画一的だ、無個性だといったネガティブなイメージで語られることが多かったが、現在でも多くのプラハ市民の生活の場となっている。2015 年 9 月 17 日、18 日、19 日、プラハ市内にある社会主義時代の大規模住宅開発地の一つであるイジュニームニェスト（South Town の意）（図１）において、住民を対象に自らが地域の魅力について考え、お互いの考えを共有する機会を創出するためにイベントを行ったので、その様子を紹介する。

■地域の魅力探しイベントの実施

プラハ 11 区役所の協力を得て、区が行う地域イベント「The days of Prague 11」(2015 年 9 月開催) の一部として、ダンスや歌が披露されるメインステージのある公園の一部にテントを設置し、ガリバーマップ[註1]作成イベント「プラハ 11 区の面白いところマップ」を実施した。参加者には、好きなところ、よく行くところなどについて、縦３m ×横６m のガリバーマップ上で場所を探してもらい、コメントを書いてもらった（図２）。周辺には、プラハ 11 区の開発当初から現在までの航空写真や社会主義時代の開発計画図、これまでの筆者の研究成果をまとめたポスター、日本の団地紹介のポスターを展示した。運営に関してはチェコ語通訳のため通訳者一人に協力をお願いした。

■イベントの結果

３日間で約 400 枚のカードが集まった（図３、４）。特に子どもたちが多く参加し、公園や森といった緑地、学校、商業施設、スポーツ施設など、それぞれが普段から日常的に利用していると思われる場所や施設に多くのカードが集まった。

これまで同地域では、地域について考える住民参加のイベントの経験がなく、区役所の方に最初にイベントを提案した際は、人が来ないのでは、と心配されたが、４年間の研究を通じて区役所の方々との信頼関係を築き、今回のイベント実施に繋がった。上手くいくかはやってみなければ分からないところもあったが、結果として、開発当初と現在の航空写真を見比べる住民の姿や、ガリバーマップを見に来た住民同士が会話する姿も見られ、プラハ 11 区住民が自身の暮らす地域について改めて考えたり、他者と意見を交わしたりする機会を提供できたのではないかと考えている。

１）ガリバーマップ：ワークショップなどに用いられる巨大な地図で、参加者は地図の上にのって地域の情報などを書き込むことができる。参加者が地図の上に立つとガリバーになったような気分がするということで、ガリバーマップという名前で呼ばれている。

図１　プラハ 11 区イジュニームニェスト　撮影：筆者（2015 年）

図２　イベントの様子　撮影：筆者（2015 年）

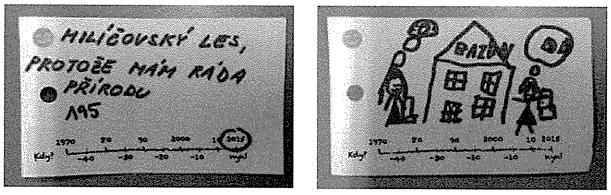


図３　記入されたコメントカードの例

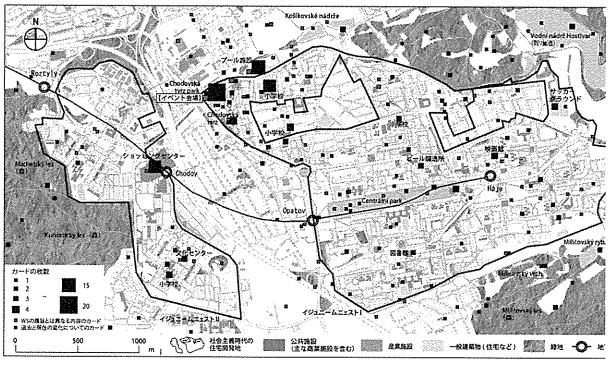


図４　ワークショップで記入されたコメントカードの分布

太秦かろんプロジェクト

博士２回生　太田 裕通

－多様性を包含する「場」としての実験的空き家活用－

■概要　―太秦の空き家活用プロジェクト―

2015 年度 4 月から開始した京都大学の建築学生が自主的に企画・設計・施工・運営で空き家を多様な「場」の複合体として生まれ変わらせるプロジェクト。敷地は京都太秦、築 54 年の木造住宅（9 坪・2 階建て）であり、2005 年までは美大の女子寮「美寮」と呼ばれていたことから「美」を引き継ぎ（「かろん : Kalon」は古代ギリシャ語で「美」）、より地域に開いた場とするよう、太秦を冠した。

■活用計画　―シェアハウス＋オープンスペース―

1 階をシェアハウスの共用部としてだけではなく、地域に開き、また学生が集える場所としても使えるよう、庭に造られた既存の石畳のレベルに合わせた土間空間をスタジオとして多目的な場として提案した。また 2 階は既存の間仕切りをさらに細かく分節するような柱・敷居・鴨居から構成されるフレームを挿入することで、住み手構成や住み方に柔軟に対応した居住空間とした（図１、２）。

■活動意義　―多様な「場」としての太秦かろん―

一見どこにでもあるシェアハウスとも見える本プロジェクトは学生や地域にとって、①地域活動のベースキャンプ拠点、②建築学生らによる空間作品を実験する場、③右京区・京北木材やデッドストックを活用する対象等として、捉えることが出来る。一つひとつの切り口はそれ自体珍しいものではないが、それらが小さな空き家の活用に織り込まれている状態こそが重要である。現代において少なくなりつつある、多様性を許容する「場」に空き家は生まれ変わることが出来ることの可能性を示している。

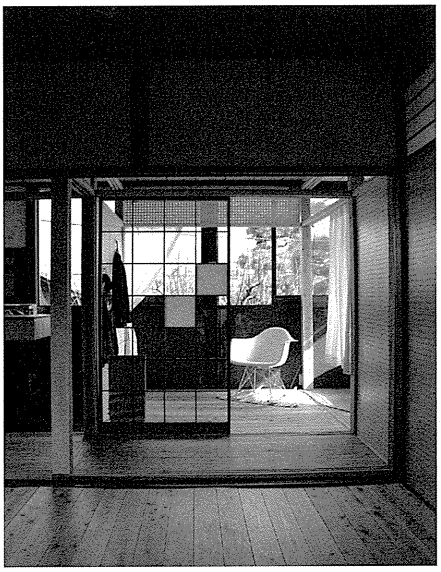


図１　２階竣工の様子　撮影：brouters

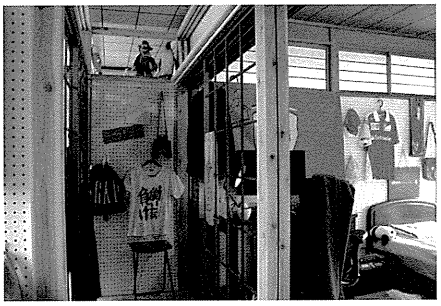


図２　シェアハウス住みこなしの様子
撮影：brouters

※本プロジェクトは以下のプロジェクトメンバーの協力の下、研究室の枠を越えた運営でおこなっている。
（メンバー：北村拓也、伊藤純一、沖林拓実、小林章太、坂野雅樹）

現代（いま）、町家に住むということ

修士２回生　清山 陽平

私は現在、京都市伏見区にある築 129 年の京町家に住んでいる。今もこの文章を家のミセの間で打っているが、通りを歩く人や車の往来を眺めながら、逆にこちらの生活を覗かれるという都市との距離感、関係性は新鮮で面白い。曾祖父の代から受け継いだこの家であるが、相続問題によりその存続が危ぶまれるようになったことを契機に、ミセの間を通りに対して開く活動を「保全」の一環として行っている。

かつてからパブリックとプライベートの中間領域としてあったミセの間であるが、映画鑑賞会や展覧会を開催する中で感じるのは、近代以降住宅から取り除かれていったこうした空間のもたらす経験の豊かさである。ミセの間は多くの他者同士が出会い、関係性を結ぶ結節点として機能しており、とりわけ近隣住民とのコミュニケーションの中から、私の中の伏見という町自体が再編成されていく感覚は、現代住宅では得難い。

今後も「現在（いま）、町家に住む」ということの価値を発見・発信することを通して、町家の保全につなげたいと切に思う。

通りよりミセの間を眺める